

長野県革新懇ニュース

2024 年 2 月号
発行日 2 月 10 日
会 費 2,000 円
購読料 3,000 円 (送料込)
振 替 00510-3-15971

293

発 行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒380-8790 長野市県町 593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

==== 今号の主な記事 =====

- 1 面 山田朗さんインタビュー
- 2 面 1 面続き、「近現代信州の歴史回廊」関秀雄 さん
- 3 面 大北森林組合等補助金不正住民訴訟を総括
読者の声、漢字パズル
- 4 面 雨よ降れ「盛り場」有情 窪島誠一郎さん
戦争を語り継ぐ 北原高子さん
映画評論『燃えあがる女性記者たち』 内山到さん

長野県革新懇

検 索



1956 年豊中市生まれ。明治大学平和教育登戸研究所資料館館長。歴史教育者協議会委員長。主な著書に『大元帥 昭和天皇』（ちくま学芸文庫）『軍備拡張の近代史』（吉川弘文館）『日本は過去とどう向き合ってきたか』（高文研）ほか
専門は日本近現代軍事史

民間調査の貴重な成果 『本土決戦と外国人強制労働』の 監修に関わって

や ま だ あ き ら
山田 朗 さん

(明治大学文学部教授)

強制労働の実態を検証

Q 『本土決戦と外国人強制労働』出版に至るまでの経過をお聞かせください。

最初にご相談を受けたのはかなり前ですが、長野県内で強制労働の調査が行われているということを知り、私も関わってみたいと思いました。それにはなぜかと言いますが、戦争遺跡が次々に発掘されたりして、2015 年以降多くの人が本土決戦研究に関心を持つようになってきたのですが、実際には本土決戦はなかったために、その準備の実態というのはまだまだ明らかになっていませんでした。本土決戦に向けては大規模な土木工事が「強制労働」という形で全県的に行われていたわけで、それはまさに本土決戦準備の極めて本質的な部分だと言えます。非常に強制的に国家の権力によって無理なことが強行されたわけ

加害の実態を 明らかにした意義

Q 加害の歴史の側面からの評価はいかがですか？

で、そこに本土決戦というものの性質が非常によく現れていると言えます。そういう意味で、やはりこれは何となくでも物にしたいという思いがありました。皆さんが長年にわたって貴重なデータを蓄積し、色々とところで聞き取りをされ、さらには韓国、中国へ行かれて、それで裏付けを取られたという成果をどうしても世に出すお手伝いをしたいと強く思っていました。ですから、そうした取り組みが形になって、世に問われることになって、本当に良かったと思っています。

レベルが格段に違う 徴用工の実態

Q 徴用工との関係はどう考えるべきでしょうか？

徴用工問題という形で、最

近ではクローズアップされています。朝鮮半島から連れて来られた人たちというのは末期においては徴用なんです。他方で当時の日本人の多くも徴用という形で義務を負わされたという主張があります。しかし、植民地朝鮮における徴用と、日本国内における徴用では大分意味が違います。朝鮮人は四六時中監視されて、全く自由がない中で、強制的に働かされました。当時の日本人徴用工も監視されていたわけですが、生活空間までは侵されていません。だから日本人も徴用工として働いたのだから、同じだと見えてはいけないわけです。今回の本の中で、それが具体的に示されたということが大きな意義です。

アメリカに出兵を 強要するための作戦

Q 本土決戦と強制労働の関わりはいかがですか？

もともと、松代に大本営を設置するという話は、本土決戦準備とは別の話だったんですが、両者が結果的に重なってしまい、本土決戦の総司令部を松代に置くという話になってしまった。本土決戦準備ということになると、松代をどう守るかということが必要になるわけで、どんどん地下工場のような軍事施設が長野や隣県に移転してきました。大きく言うと岐阜県、長野県、群馬県などに一定の持久戦ブロックを造っていったのですが、かなり粘り強く戦うということを前提に考えていたわけです。ですから、本土決戦というのは、水際の攻防ということだけではなく、内陸部に相手を誘い込んで、相手に打撃を与えて、それで講和の機会を探っていくことを想定していたと言えます。そのことが、大規模な土木工事が行われたことから見えてくる点があります。



『本土決戦と外国人強制労働』長野県強制労働調査ネットワーク編著 高文研 2200 円

ややもすると、自分の意思で来た人もいるんじゃないかという議論が必ずされるわけです。また、強制労働とは言っても、当時の法的に徴用というのがあって、日本人はみんなそうだったんだという主張もあります。しかし、連れて来られた形はいろんなパターンがあって、この人たちは自由に帰るといえることはできなかったし、自分の意思で仕事を變えようと、住む場所を變えることとかは一切できない。拘束力の強い枠組みの中で生きていくしかない。これは同じ法的な徴用という枠組みの中であつたとしても、大分持つ意味が違います。この本のように、具体的に被害者の声が伝えられていないと、朝鮮出身の人は何か被害妄想を持っているというように捉えられてしまう恐れがあります。具体的に如何に彼らの労働の実態というものが酷いものであつたのかということ

をきちんと議論していくと、強制連行あるいは強制労働ではなかったというようなことは突破できると思います。

アメリカに出兵を強要するための作戦

Q 本土決戦と強制労働の関わりはいかがですか？

もともと、松代に大本営を設置するという話は、本土決戦準備とは別の話だったんですが、両者が結果的に重なってしまい、本土決戦の総司令部を松代に置くという話になってしまった。本土決戦準備ということになると、松代をどう守るかということが必要になるわけで、どんどん地下工場のような軍事施設が長野や隣県に移転してきました。大きく言うと岐阜県、長野県、群馬県などに一定の持久戦ブロックを造っていったのですが、かなり粘り強く戦うということを前提に考えていたわけです。ですから、本土決戦というのは、水際の攻防ということだけではなく、内陸部に相手を誘い込んで、相手に打撃を与えて、それで講和の機会を探っていくことを想定していたと言えます。そのことが、大規模な土木工事が行われたことから見えてくる点があります。

要するにこの戦争に勝ち目はないので、本土決戦とは言っても、いかに相手に出兵を強要するかということ、水際で多くの部隊を使つてアメリカに出兵を強要する、内陸部に侵攻してきたアメリカ